慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヴェニスの石（中）ラスキン伝一八四九-一八五三年の一節
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.4 (1924. 4) ,p.557(93)- 582(118)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240401-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雜錄

『ヴェニスの石』(中)

ラスキン傳一八四九—一八五三年の一節

奥井復太郎

五

一八五一年八月ラスキンは妻と共に數名の同行者を得て瑞西より再びヴェニスに赴いた。其の目的は勿論「ヴェニスの石」の完成にある。此の瑞西廻遊には、新しく得た友、ミレイスを誘ふて伴はしめるを得ざりしが、ラスキンは侶伴を得たる旅に屬する少なからざる喜びを經驗した。愉快なる旅行の後彼等はヴェニスに入つたが、其處には又もや強い刺戟が彼を待つてゐたのである。

此の時のラスキンの心情は山嶽、自然の美とヴェニス建築の藝術美との兩者に惹かれて其間に一つの平衡を保ちしもの丶如くである。此の兩者は何づれもラスキンにとつて貴重なるものであつた。其は終生渝る事なき幸福と喜悅と生命との源泉であつた、併し屢〻彼は兩者の感興の間に彷徨してゐる。人間藝術の尊貴を認めては自然の眞美にのみ汲々たる事の足らざるを思ひ、藝術の研究に耽つては自然の偉大と魅力とを忘じ難しとなす。兩者は遂にラスキン獨特の方法によつて結びつけられるものである、元來建築藝術の研究勞作はタアナアの偉才賞讃に托した彼の自然解說の派生的傍系であるに過ぎない。されば既に一八四九年の旅行(瑞西)に於ける彼の大自然に對する熱情が熾烈なりしを述べた、が彼の心は再び自然界へと戻つて行つたの

である、唯、彼の遂行の途にある建築藝術に關する勞作は彼に散漫なる放擲を許さなかつた。ラスキンの勞作が屢〻散漫を以つて非難せらるゝは少しとせざれども彼は一つの問題を興味の轉向によつて中道にして放擲せし事は無い、彼の美術論、建築論、自然論乃至軈て見出しうべき社會、政治、經濟等に關する諸論も偏見、固陋、怪奇の非難こそあれ、何づれも中途半成にして放擲したものではない、是等の諸問題は常にラスキンの全生命、全精力を傾注せしむるに足る力と熱とを以つて彼の魂に觸れたものである。故に彼の多岐に亙る著書の中に讀者は何づれも堂々たる徹底的研究の結果を認めうるであらう。

此の時に在りてもラスキンは建築論に投せる彼の勞作の繼續に吸引せられた。勿論彼の興味は全く消失したのではない。唯後に示さるゝが如く彼の感興は「建築の七燈」の連續なる「ヴェニスの石」の完成よりも更に再び自然界の現象へと轉じて行つたのである、この轉向は一八六〇年別途の變轉によつて又もや影響せられ、後年自敍傳中に回想しては一八五〇年より六〇年に亙る期間の大部分は多く空費せられたりと云はしめたのである。一八四九年の旅行中の興趣觀察は「近世畫家論」第三、第四の兩卷の基礎をなすものなるが、從つて一八五一年瑞西廻遊は明かにラスキンの心が藝術と自然との眞善美の間にバランスを保てる時なりし事を語る、即ち同年八月十九日ヂェネヴァに發せる彼の書翰には明かに彼が軈て「ヴェニスの石」の完成に投せんとする勞作の夥しからず以つて直ちに自然現象の觀察に戻りう可き意嚮を語つてゐる。

併かし彼がヴェニスに到るに及んでは、左程容易に其地を棄て去るを得なかつた、九月二日には「ヴェニスは今迄よりも遙かに美し、余は此地にありて著述を完成し、修正しうる事を最も深く感謝す」と書いた。從つて茲に又極度の緊張と勞作に充てる忙しい、彼の生活が行はれた。ヴェニスへの執着は其地に於ける彼の友人の世話による彼の住家に對する感情中にも現はれる、九月父に宛てた手紙の中で此の居宅に言及し、

「今私の氣分は學校以來今迄にない程きちんと落付いてゐます、ですから若し著述が巧くゆかぬと云ふならば、確かにそれは私の罪で、外の人の罪ではありません。……何故と云へばこゝでは私の生活中初めて本當に自分の家に住んだと云ふ氣がするからです」と。

併しかく彼が其の執着に熱せるヴェニスも後年に至つては單に其當時の喜悅に充てる自己の姿を回想せしむるに止まつたのである。

コーリングウッドの云へるが如くラスキンは此當時未だ隱者でもなければ異端者でもなかつた。故に彼の交際は相當に廣くヴェニスに於いてもラスキン夫妻は其の社交界に可なりの地位を占め、彼自身も英國のそれに比して落着きと整頓のある席上に列するを好みし樣に思はるゝが、其は遂に彼の關係ではなく從つてその活動は主としてラスキン夫人の舞臺となつたのである。かゝる時間はラスキンの仕事を妨げるものに外ならない。彼は朝六時半より夜の九時までに亙る一日を絕えず「ヴェニスの石」第二、第三兩卷の構成執筆に投じた「頭も心も皆自分の本に這つてゐる」と彼は五十二年二月四日に書いた。五十一年九月より翌年六月に亙る滯在中彼は草稿と其地に於ける研究を必要とするものゝ記錄を悉く纏め得た、勿論彼の構案、揀擇、推敲は歸英後の仕事である。

ラスキンの宗教論並びに其感情に就いては前號に數言をのべた。「建築の七燈」「ヴェニスの

石」に著しく認めらるゝ排ローマニズムの調子は清教徒の教育を受けたラスキンの羅馬教に對する反抗の表現にして建築藝術其他偉大なる中世藝術とロマンカソリックとの結合を少くとも阻止せんとする努力を語るものである。彼が自敍傳に記する所によれば「ヴェニスの石」の用意に當りて研究せる歴史的知識は彼の排羅馬教的精神を強からしめたのである。然かも同じ自敍傳中に於いてラスキンは、偉大なる時代のカソリック美術に對する彼の尊敬は當然その時代精神なりし加特力教々義の承認に彼を導く可かりしなりと漏してゐる。ラスキンの宗教的感情又は宗教觀を研究せんとする者にとつて自敍傳第三卷第一章はその思想的變遷を吟味する上に於いて最も興味ある一章である。其は彼が遂にプロテスタント流の偏見より脱却するの經路を描く。「近世畫家論」に於いて述べられし山嶽高地殊にアルプスの大自然が心情を純化するの力を回想し『岩陰の間に古の隱遁者が荒野に於いて悟りしが如き思想を認めう可しとの主張は、其が穩當なるや否やを問はず、全く眞理ではあつた。余の有せる通常の過誤又は弱點は如何なるものも皆、丘岡の間に於いて叱責せられた、而して余に與へられたる力に從ふて、悉く正しく又は賢明に費されたるものとして回想しうる時代は唯、モンブラン、モンティローザ或はユングフラウの視界に在りし時であつた』と。此點に於て彼はグランド・シャルトラズの修道僧の尊敬しうべからざるを語り（一八四九年の旅行）隱遁的生活は是等地方に於ける偉大なる自然力と相俟つて心情に敬虔なる觀念を深からしむるを觀じ『余は最も強く此の感化の下にありし時古代最偉の國民又は基督教信仰の最大なる教者の思想を嚴肅ならしめその心情を純化するの山嶽

の力を「近世畫家論」の最後の章に於いて研究せんと試みた、然かも其時余の爲しうる限りに於いては正しくそを研究し得たりと余は信ずるのである。併し其當時余の單に感得するに止まり確認するを得ざりし一事項、即ち、此の高き階位を有せる凡べての感覺性が、近代歐羅巴に於いては、先づ十五世紀の美術上の奢侈によつて、次いで十八世紀及び十九世紀初期の卑俗なる慾望によつて毀滅せらるゝに至りし事情は之れを細說する事なかつた。然かも其毀滅は宗教家自からも自然の美又は崇高による教養を受け得ざるに至りし程に徹底せるものであり、かくて彼等宗教家は僅かに都會の敗頽中にあつてその奉仕慈善を以つて他の衆人に益あれども、山中に赴きて教を說き又は荒野に踏み入つて祈らんとする事あらば自から己を迷ひて或は遂に墮落にも及ばんとするのである』と。故に一八四〇年の旅行に於いて經驗せる、Le Puy の St. Michael の僧院に於ける修道尼との交談に就いて彼女等の敬虔なる生活は其の隱遁的生活を圍繞する山地の靈覺に基くものなりと斷じ、更に一八四二、四四年の旅行に於いて見聞せるシャモニのカソリシズムを描いてはかく云ふのである。

『吾々は何づれも純カソリックの村落、谿谷に於ける生活の全樣式を見、かくて私は皆が心の中に、其生活が吾人のついて知れるいかなるものゝ如く全く基督教的であり、又吾人が未だ内に殘しおける些々たる信仰をも消滅せしめんとする、英國の日曜日の勤行よりも遙かに愉快にして麗しきものと認めたと思ふ』。

『併し余に於いて更に深かき印象は日曜日も又月曜日も等しく、且つ若き時も又老いたる時も常にあらゆる時と事情とを通じて、彼等

の生活の上に自己の幸福なる信仰を絶えず且つ敬虔に確持せる事であつた。其は尙はサヴォイ、ワルドステッテン、チロール等の山地カソリックの全地方に彼等の完全なる名譽と平和との中に殘れるものであり、然かも何等論爭又は他宗の信仰者に對する害意なくしてかゝる信仰を保てるのであつた』。

かく又ヴェニスに於ける修道院生活に多大の愛着を感じ（一八四五年）更にラスキンが近世の極端なる世俗的物質的生活に嫌厭を催し、且つ偉大なるカソリックの藝術を崇拜せるにも拘らず尙はカソリック教義に融合し得ざりしは其原因唯、次の一點にかゝつてゐたのである。彼はカソリックの政治的階級組織と天國の狂熱に浮かれたる者の殘存的孤黨とが其の反對者に對する態度に於いて救はれ得ざる程大なる過誤に陷れりと見た。即ちかゝる關係が何づれの國に於いても公正にして且つ寬宏なる自由主義的指導者の彼等に對する非難を招きし所以である。かくてラスキンは近代的生活の一般を批評して云ふ、

『斯く余は「ヴェニスの石」の著述に際して爲めに用意せる史書研究の着實なる進行の中に、俗界と教會内とに於いて均しく、人々の心情が同じ夢想と慾望とによつて迷路に導きひかるゝを見、更に彼等が其直接且つ日時の義務より逃避し、又禁慾的或ひは放縱なる生活のいづれに於けるを問はず、其隣人を彼等自からの如くに尊敬し愛撫するを爲さゞるに於いては、神の完成を求めんとするも將また地上の快樂を求めんとするも、いづれに於いても等しく彼等が神の法に恭順ならざるを見出したのである』。

故により原始的な或ひは一般的な宗教的感情を既めては、

『神の平和は勤勉なる貧しき者のあらゆる義務心と慈愛に滿てる心情の上に置かれ、純粹宗教の唯一の不變的形式は有益なる勞作と信仰的愛と無極の慈善とにある事の感を强くしたのであつた』。

されば、ラスキンは誤りたる基礎に立つ形式的既成宗教並びに其の獨存排他の精神と權威とを斥ける者である。併し他方彼は漸次プロテスタント流の宗教觀を棄てゝ行く、彼の聖書研究は明かにプロテスタント流の釋義に疑問を懷かしめ其結果一日フレデリッキ・モウリスに反問して彼の解釋に不滿を覺えしむるに到つた。又カソリック美術の愛好は漸次カソリック精神との共鳴を感せしめた。かくて彼自からの言葉に從へば、『ピサのカムプ・サントに於いて働ける時代のより崇高なる感情は漸次消え失せると共に余の育くまれたる宗教的教義の虛僞も必然に發見せらるゝに至り』當時彼の宗教的感情は『是等の事情の交錯中にあつたのである』。モウリス流の釋義、ラスキンの名付けて云ふ Mauri-cian free-thinking に多大の不滿を感ぜる彼は聖書の解釋に於いてプロテスタントのそれを是正とせず漸次カソリック教の釋義の賢明なるを悟つたのである。かゝる宗教的思想の變遷は外面的出來事としては一八五八年彼がサバス安息日の掟を破るに至つて、遂に最後の點に到着し、エヴェンヂリカルな信仰は遂に一掃せられてしまつたのである。併し其は尙は來る可き數年後の將來に屬するが故に茲に詳言するの要を見ない。

聖書の精讀は此頃の海外滯在中にも廢されなかつた。其研究が彼の社會觀を決定する上に多大の影響を及ぼせるについて正しく單なる研究

に非ずして上層構層の基礎となれるものであつた。諸種の疑義、宗教的感情はヴェニスより父に宛てたる書簡の中に現はれる。ラスキンは外形的儀式の遵守が何等効果なきを見更に又一つの宗教的經驗を語つてゐる。其處に窺はれる彼の考へ方は聊か功利的である、即ち曰く

『兎に角私は聖書を眞實のものとして振舞はうと決心しました。若し眞實でないとしても、爲めに以前より惡い結果に陷ると云ふ事はありませんし、キリストを信仰し彼を以つて私のあらゆる行爲の師たらしめんと決心しました。確かに全然聖書を信ぜぬと云ふ事は其れを信ずると云ふ事、同樣に困難であります。何づれの側にもミステリーはありますが、キリストを己の師として私に授けたと云ふ事は最上のミステリーだと深く思ひました。』

（一八五二年四月九日附）

當て一八四八年にも彼は斯くの如く考へた。即ち神の存在を示し得ずとなす否定論者に對して、同時に又神の存せざる事をも示し得ざる可しとの論據によつて、神の存在を信じて利益あらんには、否少くとも特に不利を蒙る事無からんには、信ずるに積極的なるの利益を說いてゐる。（八月二十四日附父宛書翰）併し之れを以つてラスキンの神觀の全部となすは妥當でない。功利主義的に考へ論決する事を以つてラスキンの終局の主張なりとは云へない、蓋し是等の書簡は比較的に宗教的儀式に冷淡であり形式的宗教心に囚はれざる、所謂信仰心の乏しきラスキン父子の間に問題として論ぜられたる所を示すに留まる。父ジェームスと子ジョンとが母に比して極めて嚴格なる意味に於いて非宗教的なりしはラスキンの常に認むる所である。

「ヴェニスの石」第二卷には屢〻著者が育くまれし宗教的觀念の安定を破る章句を見出すとはイー・ティー・クックの所言であるが其は以上述べ來たつた事情によりて了解しうる所であり、茲に非羅馬教的觀念と之れに相反せる變化とが同書中に於いてバランスを保てる事を想像しうるであらう。

更に此機會に於いてラスキンの純眞なる宗教的感情に就いて語りたい。

彼は單なる美術上の趣味愛好を以つて彼の宗教的良心により非難す可きものなりとす。即ち前掲の五十二年四月九日の手紙（父に宛てた）にその自我的生活を回想し多少の悔恨の情を示してゐる。

"I began thinking over my past life, and what fruit I had had of the joy of it, which had passed away, and of the hard work of it; and I felt nothing but discomfort in looking back; for I saw that I had always been working for myself in one way or another. Either for myself, in doing things that I enjoyed, i. e. climbing mountains, looking at pictures, etc; or for my own aggrandisement and satisfaction of ambition, or else to gratify my affections in pleasing you and my mother, but that I had never really done anything for God's service. Then I thought of my investigations of the Bible and found no comfort in that either, for there seemed to me nothing but darkness and doubt in it."

更に自敍傳に於いても彼の靈的精神生活に對比せらる可きものとして美術的關係の生活をあげ

From John Bunyan and Issac Ambrose, I had received the religion by which I still myself lived, as far as I had spiritual life at all; and I had again and again proof enough of its truth, within limits, to have served me for all my own need, either in this world or the next. But my ordained business, and mental gifts, were outside of those limits. I saw, as clearly as I saw the sky and its stars, that music in Scotland was not to be studied under a Free Church precentor, nor indeed under any disciples of John Knox, but of Signior David; that, similarly, painting in England was not to be admired in the illuminations of Watt's hymns; nor architecture in the design of Mr. Iron's

chapel in the Grove.

其他諸所に確定的信仰なき事を告白してゐる。ラスキンが「近世畫家論」を現はすに至つて宗教界を放擲し遂に美の解說者として立つの牢乎たる決心を爲すに及びし事情は嘗て語つた事がある。ラスンキは自己の才能を以つて觀察者として適せりと見る態度は次に掲ぐる一八五二年六月二日ヴェロナより父に宛てたる書中の文句に窺はれる。

"Miss Edgeworth may abuse the word 'genius' but there is such a thing, and it consists mainly in a man's doing thing because he cannot help it,—intellectual things, I mean. I don't think myself a great genius, but I believe I have genius; something different from mere cleverness, for I am not clever in the sense that millions of people are—lawyers, physicians, and others. But there is the strong instinct in me, which I cannot analyse, to draw and describe the things I love—not for reputation, nor for the good of others, nor for my own advantage, but a sort of instinct like that for eating or drinking. I should like to draw all St. Mark's and all this Verona stone by store, to eat it all up into my mind, to touch by touch. More and more lovely I find it every time, and am every year dissatisfied with what I did the last."

併しラスキンが宗教的良心に對して眞に非難せらる可き美術的興味と思へるものは恐らく、藝術の解說者としての生活に非ずして彼が純粹なる享樂的趣味より發したる古代寫本蒐集の類であらう。其間の事情は均しく自敍傳に語られてゐる。

But I had never cared for ornamental design until in 1850, as I chanced, at a book seller's in a back alley, on a little fourteenth century Hours of the Virgin, not of refined work, but extremely rich, grotesque, and full of pure colour.

The new worlds which every leaf of this book opened to me, and the joy I had, counting their letters and unravelling their arabesques as if they had all been of beaten gold,—as many of them indeed were—cannot be told, anymore than everything else, of good, that I wished to tell. Not that the worlds thus opening were themselves new, but only the possession of any part in them; for long and long ago I had gazed at the illuminated missals in nobleman's houses, with a wonder and sympathy deeper than I can give now; my love of toil, and of treasure, alike getting their thirst gratified in them. For again and again I must repeat it, my nature is a worker's and a miser's; and I rejoiced, and rejoice still, in the mere quantity of chiselling in marble, and stitches in embroidery; and was never tired of numbering sacks of gold and caskets of jewels in the Arabian Nights.

此種の趣味は其性質上利己的のものであつた。美の解說に於いては尙ほ彼は神意を語りうる。併し寫本の興味については其れ自からの享樂以外に何等强き辯解の辭を有せざるのである。故に羅馬教會の古き祈禱書によつて彼は羅馬加特力の眞體を發見し得たりと雖も其蒐集には少なからざる自責の念を混へてゐる。さればかくして蒐集せられたる寫本の類は後に美術研究者の資料として利用せられ聊か彼の心を慰め得たりゝ傳へらる。其は兎に角かかる性質の趣味以外に於いてラスキンの態度は常に宗教的純眞を保つてゐた。彼自からはその生活が直接神への奉仕に非ずとするもその主張は常に神性の讃美と之れに對する服從の訓であり、其の美眞の解釋は是等を神性の德と屬性に歸一せしむるものであつた。然かも彼が其處に慊らず思ふ所以は軈て直接に神意神性の解說者として說教者として巷間に現はれんとするに至る經路を有力に物語るに外ならぬ。此の純眞なる宗教的感情を知る事なくしてはラスキンの主張思想を解し得ざるは當然であり、又彼の矛盾も偏奇も此點に齎らされてのみ悉く其儘に之れを認め得るのである。

是等の關係は五十一、二年に於けるラスキンの社會觀政治論の色彩を益々明瞭ならしめた。聖書の研究は當時の社會事相が何を意味せるや

を考察せしめ、公正、貧富に對する詩篇作者の思想は彼が研究中著しく注意を惹いた點である。此期の彼の書簡中には富裕と貧困の、奢侈と窮乏との正しからざる分配に就て、より廣汎なる社會問題に關する觀察を載せしものが少くない。さればラスキンが公然政治問題に彼の雄渾なる筆を振ふに至つた事が五十二年のヴェニス滯在中に起つたとしても其は吾人に何等不思議の感を與ふるものではない。吾々はかくして遂に公表せらるゝ事なくして終つたラスキン最初の政治問題に關する執筆に言及しなければならない。

六

一八五二年ヴェニス滯在中にラスキンはタイムス紙に寄稿する目的を以つて租稅、選擧、教育に關する三つの書翰を先づ父に宛てゝ送つた。不幸にして此等の書翰は此方面に於けるラスキン親子の意見の不一致を來し遂にラスキンの目的は達せられずに三書翰は空しく筐底に納められてしまつた。ラスキンのタイムス寄書は勿論當時の政治上の時事問題に關する彼の觀察である。此時英國に於いては、羅馬教徒解放令は行はれてゐたが愛蘭問題は依然未解決であり、憲章黨運動は抹消せられるに至つたが選擧權改革の運動は尙ほ繼續してゐた。穀物條令は撤廢されたがディスラエリを中心とする保守黨は尙ほ保護政策に復歸するの企圖を捨て得なかつた。一八五一年早々ロード・ジョン・ラッセルの內閣は破れたがロード・スタンレーが內閣組織に失敗せるを以つて再び廟堂に立つた。併しロード・ラッセルとロード・バアマストンとの內訌は後者の辭職より惹いて前者の瓦解を齎した、一八五二年二月にはスタンレー卿が內閣總理の印授を帶びディスラエリは Chancellor of the Exchequer となり又政府黨首領であつた。

ラスキンがヴェニスの假居に於いて筆を政治問題に移したのは丁度此時であつた。彼は第一書に於いてディスラエリは單に小說家に過ぎずと嘲笑し去り自由貿易と租稅原理とを論じ自由貿易を擁護し直接累進課稅法を主張した。第二書に於いては後に Fancy franchise と呼ばれしものと普通選擧とを併合したる制度を唱導し各人は何づれも投票權を有すると共に財產教育の有無に從つて其投票には輕重の意義差別を附らるべきを說明し、從つて此點より第三書に於いては教育の原理を解明して教育の內容には博物學、宗教、政治學の諸要素を含み其範圍に關しては國民教育たるべきを主張する。

是等時勢に先立つ、「半世紀」と稱せらるゝ彼の見解はカアライルが Latter Day Pamphlets を出版して後二年、其影響を受くる所多しとせられる。カアライルとの交友は不思議にも明白でない、併し「羊舍構造論」中にもカアライルを引用し更に後段に記するが如く「ヴェニスの石」第一卷について彼の獻本に對しカアライルより接したる稱讃の手紙によつても此頃最早相當に深い交渉のありしを思はせる。併し未だラスキンはカアライルより傳へたる精神をその全部に表現するの域に達せざるが故に彼の傾倒する事未だ全身的でない事を想像せらるゝ。此點は更に後日の穿鑿をまつ事とする。

附記　イー・テイー・クックがライブラリーエヂション第三十六卷の序文に云ふ所「恐らくは一八五一年以前の事」とするも其論據は「ヴェニスの石」第一卷に對するカアライルの手紙に基くのである。故に一八四九―五〇年の頃の交友を記して「此頃カアライルとの交始まれり」と云ふも以上の意味に過ぎない。併ライブラリーエヂションの前卷はラスキン書翰集にあるが其序文にクックが掲げたる所のカアライルの手紙並びにラスキンの書翰を見れば交友漸く緊きに到つたのは一八五五年の頃と思はれる。

トリー主義の然かも其舊派に屬する又ディスラエリの尊敬者である父ジェームズはジョンの此企圖に對して極めて大なる苦惱を感じた。彼が恐るゝ所は其子が共和國論者に轉ぜるやの危惧であつた。誠に是等の書翰は一つの反抗的精神に於いて書かれてゐる。ラスキンは政治問題に對する彼の立場を說明して云ふ（一八五一年十一月十六日父宛書翰）

『佛蘭西革命は兇惡なる政府の必要なる改革に於いて始まつた狂激である。其狂激が最も狂暴なる時に於いて達したる原理は今や吾々の尊敬すべきロンドン市民の食後の演說の題目となつてゐます。かゝる事の根元は確かにあります。政府の中に行はれた思切つた弊害、下層階級の間に起つた運動の眞の根據があり、彼等は又勿論此運動を何等の正しく公正にして合理的なる原則で指導しようともしてゐない。…併し私は氣を附けて、急進論者にあまり同情しすぎてはならぬ。エッフィーは仲々巧い事を云ひました。私は佛蘭西に居ると凡ての人々が急進論者なので大變に保守論者であるが墺太利にあると外の皆が保守論者だからして大變急進論者だと。私が魚の好きな（勿論食用としてゞなく生き物としての意味ですが）理由は魚は常に流れに頭を向けて泳いでゐるからだと思ひます。私は其れは自分にとつて一番健全なる立場であると考へます』。

然かるに斯くの如き態度は父ジェームズの最も恐れる所である。是間の消息は同年三月六日より四月二十六日に到るラスキンの書翰による父との交渉の中に明かである。

『英國よりの報道は實に馬鹿々々し過ぎます、私はとても耐へられません。私は此三日間、父上の手紙を書くに除いてあるいつもの時間を穀物條令、選擧問題と敎育に關してタイムス紙に書を寄せる爲めに用ひ樣としてゐます。…若し父上がタイムス紙に寄せていゝとお考へになつたら載せて下さい、若しさうでなかつたら皆父上に宛てゝ書いたものと思つて頂きたい…』（三月六日附）

故に此書翰が父ジェームズの手に握りつぶされて了つたとしても其は豫めかゝる約束に基くものであつた。併しラスキンが飽迄其書翰の公表を欲し且つ父の態度を慊らず思つた所以は次の理由からでげる、

『三月十四日――父上が私のタイムス寄書を送くるに値するとお考へなさつたか又タイムスが其れを載せるかどうか私には分かりません、併し私は寧ろかう云ふ希望なのです――即ち是等の書翰が現在に何にか爲めになると云ふ事を望むのでなくて、將來此書翰に引證する事の出來る希望で公表を欲するのです。議院に對する現在の制度が採用せられた時私はまだほんの小供でした―が私は其制度は下らぬものだと云ふ事を直に云ひました、勿論小供の意見など何人も氣にかけまいと感じたので印刷物の中にさう云つたのではないのです。併し私はタイムス紙に寄書しておいて今になつて其時に陳べられた自分の意見を引證する事が出來たらと、心から願つてゐます。同樣に私は二十年以後になつて私が生きてゐたら、是等の手紙に言及して「自分は諸君にかく語つておいた、しかも今になつて諸君は漸く其れに氣がつき出したのだ」と云ひ得たい爲めに、タイムスが寄書を載せるのを希望してゐるのです。さうすれば此事は、よし今日それが爲―能ふ所は極めて僅かとしてもあ、

る力を與へる事になるでせう』。

此書簡は次いでラスキンがタイムス紙上に寄せんとした書翰の一内容を語つてゐる、即ちそれによれば彼は

『私は是等の書翰を出來る丈け平易簡單にしておいた。私は低廉なるパンの問題と相結んで低廉なる勞銀の問題に入らんとする誘惑をうけた、併し其は餘り遠く走りすぎると云ふ事を見出しました。同じ方法で私は所得稅の累進稅率が相互に妥當たる可きの方法、即ち年九百磅を得る人が八十一磅の納稅を强制され爲めに所得が八百十九磅に減少されるのに一方年八百九十九磅の所得を得てゐる者は七十一磅十八志四片四分ノ一丈けを支拂へばよくて、從つて後に八百二十七磅一志七片四分ノ一を殘しうるなんて事のない樣に、妥當の方法に就いて更に深い陳述を企てたいとも思つてゐましたが、是等は何づれも餘り多くの場所をとるので、先づ原理を明瞭ならしめる丈けを望んだのです』。

二十年後を期望するラスキンも是等の所說が決して新奇なる考に非ざるは認め、更に屢々衆人の口にする所であり平凡常識事である事をも知つてゐる。たゞ簡單な問題が種々錯綜して其處に眞と誤とが合體してゐる事あるが故に眞相を捉み得ず眞の解決策に適し得ないとするのである。

『三月二十三日――是等三つの書翰を二十年後になつて引證する事の出來るのを望んでゐます、――人々は今日見るが如くに又無用の論だと云ふかも知れない。私は又如何に多くの事がこの問題に關して云はれてゐるかを知つてゐる。英國中の、幾百萬なるか正確の事は知らぬが凡べての口が同じ問題に就いて語りつゝある時、眞理が屢〻語られ又屢〻容認せられてゐると云ふ事はありうるのです、眞なるものゝ凡べてが幾百萬度となく云はれて來た。併し其が虛僞と混同せる限りは先づ其の游離を企つる事の方がより賢明であるでせう。私が新聞紙などで見る所のものはいづれも簡單な問題に對して人々の頭腦が混亂せる事を示してゐます。是等三つの書翰はイートンの文法書同樣、別に斬新なる何事かを云はんとするものではない。が簡單明瞭の形式で文法的、普通の規則を與へんと企てるものであり、其は充分に注意して守らるゝ限りに於いては、經濟學上の諸論文に充てる圖書館よりも恐らくは遙かに有益なるものでありません。若し人々が其を目して平凡の眞理だと云ふならば彼等をして其の上に行動せしめませう、若し人々が凡べて誤てりと想像するならば、それこそ是等の書翰が益々必要だと云ふものです』。

此の時父の返信によつて明かである樣にジェームズは旅行中であつた。デムマアク・ヒル宛の三書翰は母の手に受取られた。イー・ティー・クックは此事情よりして「彼の母が手紙の受取を認め、ディスラエリ攻擊は彼女の夫を怒らしむる樣に賤したものゝ如くである」と推斷してゐる。蓋し三月二十六日母宛の書面には母に對して英國並びに一般歐洲事情に就いて言及してゐる。

『三月二十六日――……母上が英國に於いて生じつゝある事についてかほどよくお考へになつてゐると知つて大變嬉しく存じます。併し母上は私の此前の手紙によつて私は英國の事許りを考へてゐるのでないと云ふ事を御覽になりましたでせう。明かに全歐洲諸國に亙

つて過誤の外何ものもありません、其は又人口多く或種の文明に開けた地方の、然かも今日では衰退しつゝあつて廢滅に進んでゐる大部分の地域に比較する時、正に英國にも存在する所のものです。併し新内閣が可なりうまくやつてゐると云ふ事は非常に喜ばしい事です。母上が未だ私の書翰をタイムス紙に送つて了まはれないてせうが、又送らうとお思ひになつてゐらつしやるといけませんから、私はディスラエリ最負の父上の事故彼についての文句には箇を入れて下さる事を願ひます。全文はそれを削つても連絡をつけて讀めますし或ひは無い方が反つてよくなるかも知れません』。

是等によつてラスキンは早くも兩親の反對を察してゐる。併し父から直接の返信が到るに及んでラスキンは自己の立場が父のそれと異ならざるを辯じ且つ彼は謂ふ所の本旨を明かにしてゐる。三月二十九日、三十日の書翰は即ち其れである。二十九日の書翰に於いては彼の行爲が父の心勞となりしを陳謝し同問題については歸宅後共に談ず可きを約し更に彼の態度に何等變化なきを表明してゐる。

『……併し私が共和國論者に轉じつゝあるとお考へになつて御心配下さるな。私はたゞ一つの點即ち私が嘗て有したスチュアート家に對するジャコバイトの尊敬、大學時代にジェームズ二世の爲めに起立してゐた當時の尊敬を今は持つて居ないと云ふ事以外には他のあらゆる點で十年以前ありしまゝの私であると信じております。私は「七燈」の中で忠節につき文句を書いて以來確かに意見を變じてはおりません。私は忠節と云ふ言葉は、結局其が本當に意味する所のもの、即ちロイ―アルティ―即ちロイ或はロー（法）に對する尊敬を意味するものとさせたのです、即ち王者が法律に遵ひ其を代表する限りに於いて王者に對する尊敬を意味し又單に一時定時に於ける成定法律のみならず一般に律法と恭順との諸原理に對する愛を意味したのです』。

此最後の點はラスキンの思想中最も特殊なるものである、之れが爲めに自由、平等の近代的要求に反抗し權威、法則を尙び乍ら然かも既成のそれ等を其儘に容認しないのである。換言すれば彼は現在社會事相中に現はれ來たる諸權威、法　の正しかざるを指摘し之れが打破を叫ばんとするのである　此思想は彼の社會的改造的實驗的企圖として現はれたゝ聖ヂョーヂ組合の誓約第七項に現はれたのである。更に同書翰の後半並びに三十日附の手紙には彼の選擧權論を解明してゐる。

『手紙にある普通選擧に關しては若し父上が充分に御注意下されば私の考が父上と同じく普通選擧と云ふ事より可なり隔つたものであると云ふ事を御覽になるでせう。――そして私の方案によれば才能や地位のある一人は投票に於いて庶民（モッブ）の全團よりも一層重きものであり從つて庶民は最早投票の勸説に値しない事と　り贈賄の組織は少くとも五磅札の形式では全く畫餅に歸するでせう　徒黨が或は變つて生ずるかも知れませんが種々の方法で防止する事が出來ませうし、又私の三書は單に一般的論題の陳述であつて其を支持するの努力でありませんから其點には這りません　私は考へる所あつて資産又は教育によつて與へらる可き投票數に關して格別の明細を企てませんでした、蓋し其の爲めには、教育資産について一般民衆以上に適當の優越を與ふるには

資産及び教育の平均的分配を研究する必要が私にはありますから。併し私は如何なる人をしても一つの意見を與へる事を不可能ならしめると云ふ事は不條理にして無益な侮辱であると主張します、たゞ彼の意見に適當の重みを附せしめるのです。同樣に私は土地が其の價値を維持し或は增加しう可き方法の議論には入りませんでした。たゞ若し何等かの損害が生ずるとしたならば其は分明な唯一の損害であると云ふ事を云つた丈けです。ディスラエリに關しては私の一昨日の手紙で父上は私が彼に對して何等怨恨を持つてゐるのでないと云ふ事はおわかりでせう。ディスラエリの仕事は私に怜悧だが浮華であると云ふ感を與へます、チャンセラア・オブ・ゼ・エキスチェッカアたるに適した一番最後の人間です。恐らくウッドはもつと獣目だつたでせう。私は近代的意味に於いて、一つの惡い小說を書くにも非常にいゝ政治家となる樣になみならぬ多くの頭がいるのだと云ふ事が尤もらしく思はれます。……』

『三月三十日――……私は此三年の間父上が選擧について仄かにお仰せられた所の諸點を勘考しておりました。私は一般の人々を政治に關して考へる事から引き離す事が出來るならば非常に喜ばしいのですが、――今日ある不可能事中大部分のものはその爲ですが、印刷術の發明以來其は不可能です。唯問題は如何にして彼等を國に於いて正確に適當の重みのものたらしめるかと云ふ事で唯それ丈けの事です。現在では英國の選擧團體は低級な容易に買收されやすい中流階級です。私は之れに一人每に二志六片で買收するにはあまり面倒であらう所の民衆と上流階級とを加へ、彼等の地位、思慮並びに富に比例した重さを有するものゝ一團としたいのです。父上も私も銘々投票權を持つてゐます、同じく私共の過激な御者も投票權を持つてゐませう。私は自分の一票を提出する事を自分の割に合ふ仕事とは考へませんが彼はさう考へて其を實行します。私の方案に從ふと彼は今七十ですが五十票を持つており私は四百又は五百票を持つのです。私は投票するの勞を取るでせうしかくして彼は他の可なり多くのより甚しい過激論者を參らせる事になり得ます。計算の困難に就いては計算家にとつては十位で加算するも百位で加算するもいづれも同じ樣に容易だと信じますし、檢證に關しては各人は、彼の姓名と票數とを每五年目の檢證日と稱する一定日に證明せらるべき所の捺印に於いて受く可きである。選擧に際しては、記錄室に參入して彼の捺印を示し、彼の候補者の名に相對して其數を認め、彼の姓名は同時に其の文字の順序に於いて書かれ、そして退出する。かくすれば大した混雜はないし又選擧に於いてなぞを無駄口を聞く事がない。

『私は年齡の制限を七十歲におきます、蓋し私は非常に活動的な生活に於いては多くの人々は五十歲を過ぎなければ考へるなんて暇を持つまいと信じるからです。私は知力が七十歲以下の人にして何等衰退せるを今迄に見た事がありません、寧ろ其衰退が疾病或は遊蕩より發して十六歲位に於いて然かよく生じてゐるに非ざれば心力は常に增加するのです。タアナアは正しく七十歲に於いて其盛頂に達しました然かも其以前ではありません。精神は適當なる人間生命に定められたる「七週」の內に衰滅するものにはあらざる事を而て凡

べてのその最も良き最も有益なる力は若し精神が適當に取扱はるゝならば肉體の結びつく限り永く留まるものであると信じております』。

四月二日の書翰に於いては教育論について父の意見と合致を見たるを喜びつゝ其内容を語つてゐる。

『私は教育論の手紙が父上に喜びをお與へしたと云ふ事を非常に嬉しく思ひます、私は、仕事を爲すには始めからあまり力いつぱいやりすぎずに、輕く打いておくと云ふ事について父上がお仰せられた事と全く一致しております。人は此教訓を松の平板に釘をうち込む時に常に得るのです、初め輕く、正しい方向に、自分の指を注意しながら打つと云ふのが大切なのです。どつちの側に少しでもよつてはならず、又少しでも強すぎてはならない、でないと釘は決して入りません。併し一度巧く入つてしまへば指を離して打打強く強く打つがいゝ遂に己の腕を充分振り上げて材木を叩きつける事が出來ます。公衆はよくこの松板の如きものであります、公衆を何にかに仕上げ樣とする人達は怜悧な大工と考へられる。聖ジョセフの職業とされてゐた如くに、他の職業に於けるよりも大工職には多くの典型的教訓が含まれてゐるかも知れません。』

斯くの如き詳細と懇篤を極めた手紙の交渉は如何なる結果を來したか。後年ラスキンが政治、經濟の諸問題に其思索と筆とを轉じた時に於けるが如く父ジェームズはラスキンの政治論を全然歡迎しなかつた。三月三十日ランカスタアに於いて父が發したる書翰は次の如きものである、

『お前がさう願つてゐる樣に歸つてからタイムスへの手紙を先づ見ませう。あなたの著書に對する攻擊や新聞寄書に對する攻擊についての私の感情は次の樣な點でお前のと大變に違ふ。あなたの著書に對するあらゆる攻擊もたゞエッディーストンの燈臺にぶつかる波の樣なものだが、お前の政治論は打毀ぼされやすい「貧民窟普請」だ。そして權威（オンリティー）が必要なる機關と感ずる人は些細な力によつて屢〻打敗られる狀態に自からを曝してはならないと私は思ふのである。

『チャンセラア・オブ・エキスチェッカアを目して利口な小說家だと云ふお前の時代嘲弄は既にあなた自身を惱ましてゐる事だらう。ディスラエリは弱々しく終るかも知れない、併し現在では彼は議會を統率しロード・ジョンや議會内の誰彼に對して好敵手であり又彼の敏捷、見聞は實に驚く可きだ』

斯くの如き態度に於いては、イー・ティー・クックの語る如くに父ジェームズと子ジョンの間の親密なる關係はラスキンの親に對する孝心以外に最早何等他の知識的關係を結び得ぬ事となつて來た。ラスキンは父の此の態度に多大の遺憾を表したに相違ない。併し四月二十六日の書簡は彼が自から父の意思に反して進む事を爲さず寧ろ和解的態度をとりしを示してゐる。彼はブレ。ラファエライトに關してタイムスに寄せんとした舊稿に就いて語り乍ら、

『私は今其を自分で讀んでみて如何に拙惡なるかを見出し、如何に父上が其を公にせじめなかつた事に正しかつたかを知つて驚いております。從つて私はタイムスに送る別の書翰に就いて父上の不贊成なるに容易に信頼せんとしてゐます。實に私はダアビー卿が國民に訴ふる所あるを見て以來、内閣に對するあの

攻擊が現はれなかつた事を既に感謝しております。併し私は時々如何に自分が偏頗であり書いてゐる内は如何に自分の書いたものゝ判斷をする事が出來ないのかと云ふ事を考へると苦しくなります。私は最初は父上が非常にお喜びの樣に覗はれた教育に關する最後の手紙について御手紙のいづれにも何等評言を頂きません。併し私としてはあの書翰を好んでおります、何時かは何等かの形にそれを改作しなければなりません、蓋し、私は現在の制度を攻擊したいと思つてゐるのです――現在の教育制度ほど非常に多くの改革を要するものを外に知りませんから』。

ヴェニス滯在中の出來事であつた「政治に關する三つの書簡」を筐底深く藏さるゝに及んで遂に事の結末を見た。從つて同書翰は公にせられずして終つたのであるが、イー・ティー・クックに藏したりと雖も、彼の所信を曲げしむる事は不可能であつた。彼は自己の路を誤たず進んだ是等の思想は十二年後に「アンツー・ジス・ライト」の中に開陳せらるゝに到るまで其發展を徐々として續けたのである。然かも既に是等の社會觀は相合して「ヴェニスの石」第二卷の一章に包含せられ、遂にそが社會主義一派に深き共鳴者を見出すに到りし事は著名な出來事である。

附記　教育論丈けは「ヴェニスの石」第三卷の卷末補遺「近代の教育」として載せられてゐる。恐らく其舊稿が政治論同書簡中に發見せられなかつたのは其爲めであらう。圖書館版第十二卷には租稅、選擧論に關する二篇を集むるに止まつてゐる。以上引用した材料即ちラスキンの諸書翰はいづれも同卷々頭クックの序文に載せられたものである。其處より取捨して利用せるものなるが故に此項は同卷に負ふ所頗る大である。記して其消息を明かにする所以である。

一八五二年のヴェニス滯在には尙ほ語る可き事がある。其はチントレットの大作 St. Cassiano に於ける「耶蘇磔像」と Madonna della Saluta の Marriage in Cana の二名畫を一萬二千磅の委托に於いてナショナル・ギャレリーに購入するの計畫をたて、其旨を一八五二年三月に同博物館の評議委員會に申込んだ。不幸にして此事はチントレットの畫に價値を認むる事なき人々の爲めに拒絕せられてしまつた。此はナショナル・ギャレリーに關する彼自身の係つた事として最初の失望であつた。

斯くして多忙、多端なるヴェニスの滯在は一八五二年六月に終へ、ラスキンの一行はセント・ゴッタアドを越へて歸國した。此途次、ラスキンは再びアルプス山地の魅力に惹かれた。本稿の冒頭に敍せるラスキンの心情は玆に於いて明かに窺ひうる。Airdo に於ける七月四日の記錄には次の如き句がある

『…ヴェニスの汚穢と惡德に對して今日余が前にある風光の純潔の對照は現はし得ざるとウェッダアバアンの編纂になるラスキン全集圖書館版はラスキン著作について正確詳密を期する爲めに後年發見せられた同書翰の殘稿を集めて第十二卷々末に載せたのである。かくしてラスキンが企圖したる「二十年後」の期望は生前遂に充たさるゝ事なかりしも、後世の人々がラスキンの政治觀を以つて時勢に先立つ事五十年と稱讃するの機會を與へ得しめたのである。即ち父ジェームズが謂へる「貧民窟普請」に過ぎざりしラスキンの政治論は其の排民主々義的貴族主義的政治論に關するもの以外には課稅原理と云ひ國民教育制度と云ひ何づれも後年實施せられしもの、正に父の云へる貧民窟普請はエッディーストンの燈臺にも比す可きものであつた。

一八五二年の一挿話は之れで終る。併しラスキンが和解的迎合的態度に於いて父に對せりと雖も、又父が如何に深くラスキンの書簡を筐底

程强いものである……』と

イー・ティー・クックの言葉を借りて云へば「ヴェニスは一つの傍仕事であつた。ラスキンが自から彼の生れ故郷とも云ふ可き荒地に居るの感を覺えしは草原丘陵の間に於いてであつた。」かくしてラスキンは再び自然界の研究に沒入せんとするのであるが、其に先立つて「ヴェニスの石」の結末が語られなければならない。

附記　ラスキンがヴェニスに喜びながら然かも時には忌憚なきその醜陋を感ずる事ありしは前に一言した。一八五九年にNorton宛書面にヴェニスを指して「泥中に輝ける都あり」と云つたのは此當時の回想である。此書面は可なりラスキンの氣持を現はすものとして興味がある。次に一部を抽出する。

『一八五九年五月――其地で私は非常に多くの困難で乾燥無味な、機械的勞作を嘗めたので其地を去る以前に全く其魅力を失つてしまつた程です。分析なんて忌まはしい仕事です。問題を充分に論じ盡くす人間は不愉快な人間だと云ふ事は實にたしかです。……』

此態度は近世諸家論第三卷のそれに對比してラスキンの氣質を語る有力な材料である。勿論此書中にはイー・ティー・クックの云ふ如くユーモラスな誇張があるかは知れないが。

同じ感想を其當時に求める事が出來る一八五二年六月二十三日ローザヤアスに與へた書はそれである。其中に「一番憂い事にはヴェニスに就いておらゆる情緒（ソヴィーリング）を失つてしまつた事です」と。彼はヴェニスの生活に不愉快を感ずるとローザヤアスの詩を吟誦して美しい感興を呼び戻さうとした、併し遂に一日『Bridge of Sighs の脚下に殘された正しく一呎半ばかりの泥水を見出してから、又家路につかうとしてゐる時にプランド・キヤナルで淺瀨に乘上げてから、私はキヤナルに就いては匙を投げてしまひました、以來其等については美しい情緒を回復し得ないのです……』。

（未完）

リカアドオ派社會主義概論（下）

津田誠一

十三

前掲リカアドオ派社會主義の諸星に關しては文獻以外行藏多く湮滅に歸せるも、獨りホジスキンに於ては佛人 Elie Halévy の錄せる傳記の存するありて稍詳細に其經歷を窺ふ事が出來る。

彼は一七八七年末倫敦附近の Chatham に出生、幼少にして海軍に入り累進大尉たるに及び偶々罵言上官の忌諱に觸るゝ事ありて豫備役に編入時に年二十五。乃ち憤怨禁ずる能はず翌一八一三年 "An Essay on Naval Discipline" を表はし軍律の過酷上官の擅恣刑罰の殘忍を痛擊した。彼れが團結禁止法撤廢の鬪士として、著聞せる Francis Place を始め政治的急進派諸名士の知遇を得たる機緣亦た此一篇に發すと推せらる。閑を利して外遊三年、佛獨伊瑞諸國遍歷、歸來伉儷を得て居を Edinburgh に定め浩瀚二卷に亘る外遊感想錄 "Travels in the North of Germany" 1820 を上梓、爾來專ら文筆を以て處生の道を講せんとせしが專志に違ひて久しく貧窶に沈淪したるを漸く一八二三年 Place 並に James Mill の斡旋に依り急進派の機關紙 Morning Chronicle の議會記者となり倫敦に轉住するに及んで小康を得た。恰も擡頭し來れる勞働運動に對する彼れの識粹は此時より始まる。即ち蘇人 Robertson と協力週刊雜誌 Mechanics' Magazine を發刊すると共に Place の保護の下に工手學校 Mechanics' Institute を創設以て勞働者階級の智的開發に努めた。G. D. H. Cole は曰く、ホジスキンは勞働者の獨立教育を提唱せる先驅である。勞働者は自己の爲め自己の手に依つて教育を行はざる限り、眞に彼等に必要なる教育は決して確保するを得ない。「之を庶人の爲に計るに其主人より教育を授かるよりは寧ろ教育を奪はるゝに如かず。蓋し斯の如き教育は軛に繫けんが爲めに家畜を訓練するに等しければなり」とは、彼れの思想の根本であつたと。然も Mechanics' Institute の經營維持は急進派中產階級の資力援助